

第1回臨床宗教師養成講座 報告書

目次

ごあいさつ	p.1
第1回臨床宗教師養成講座 修了によせて	p.2
アドバイザー報告	
谷山洋三	p.2-5
『臨床宗教師に求めるもの』	
平野博	p.6-8
種智院大学臨床宗教師養成第一期生をおくって	
上田禮子	p.9-10
第1回臨床宗教師養成講座実施報告	p.11-15
受講生の感想	p.16-18
研修を終えて	p.18
今後の研修について	p.19
新聞報道	p.20



2015年4月に設立された臨床密教センター初の臨床宗教師養成講座が、去る2016年7月14日無事終了し、7名の臨床宗教師が誕生しました。

現代社会の抱える様々な問題に対して、密教の教えはどのように活かされるのか？そして密教徒は、いかにしてこの問題に対峙してゆくべきか？

このようなことを考え、そして実践する一つの拠点として、種智院大学では平成27年に臨床密教センターを設置しました。

「臨床密教」という言葉に対しては、「そもそも宗教は臨床だろう」というご指摘を頂いたことがあります。確かに「臨床」は「現場を重視する立場」であり、信者さんの悩みに応える宗教は臨床が当たり前であるかもしれません。しかし今、宗教者は激動する現代社会における様々な問題にうまく対応出来ているのでしょうか？

医療の世界で「臨床」という場合、「患者さんに直に接しながら医学的治療を施すとともに、患者さんから逆に学ばせてもらう」という意味があると聞いたことがあります。

臨床密教センターの「臨床」には、当に人々の抱える問題に正面から向き合うと同時に、現代において密教の教えをどう活かすべきかを逆に学ばせて頂く、そのような意味が込められています。

さてこの度、臨床密教センター初のプロジェクトとして、臨床宗教師養成講座を平成28年5月から7月にかけて実施し、無事7名の修了生を送り出すことが出来ました。

臨床宗教師とは、広い宗教性に基きつつ公共空間において超宗派・超宗教的な立場からの人々の「心のケア」を実践する宗教者のことで、2011年3月の東日本大震災を機に東北大学で最初の養成が始まりました。

当センターが臨床宗教師養成講座を実施するのは、宗教・宗派の枠を超えて人の悲しみに寄り添い活動しようとする臨床宗教師の精神が、全ての人が悟りを開くことを目標とし、常に修行を続ける普賢菩薩の願いと同じであり、この普賢菩薩は、密教徒の理想の姿であると考えます。

来年平成29年度には第回目の臨床宗教師養成講座の実施を計画しています。そして臨床宗教師の養成を通じて、普賢菩薩の普賢行に象徴される密教徒の理想の姿を追求してゆくと同時に、究極の目標として宗祖弘法大師空海の目指された理想の平和世界・密厳国土の実現を目指し、臨床密教センターの活動を続けてゆきたいと考えています。

本報告書を読まれる皆様にはぜひ臨床密教センター、そして臨床宗教師に興味を持って頂き、今後の動向に注目して頂ければと思います。

なお今回の報告書の作成にあたり、臨床宗教師養成講座に関わっていただいた3名の先生方に御寄稿をお願いし、研修でお考え・お感じになったことを自由に語って頂きました。末筆ながら先生方には心より御礼を申し上げます。

臨床密教センター センター長 松本 峰哲

第1回臨床宗教師養成講座 修了によせて

アドバイザー報告

東北大学大学院文学研究科
実践宗教学寄附講座
准教授 谷山洋三



1. プログラムの構成

臨床宗教師研修は、2011年の東日本大震災後の宗教者による支援活動と、それに対する高評価に基づいて企画され、2012年に東北大学大学院文学研究科に開設された「実践宗教学寄附講座」で開催されたものがオリジナルである。同寄附講座のプログラムは、その後何度も修正を重ね、2013年10月～12月に開催された第4回臨床宗教師研修が基本形となり、その後も若干の修正をしながら継続されている。種智院大学臨床密教センターは、2016年5月～7月に「第1回臨床宗教師養成講座」を実施したが、そのプログラムは東北大の基本形を参考にするということで、東北大は準備段階から全面的に協力した。

このプログラムは、様々な対人援助職養成と共通する体験学習型であり、講義、グループワーク、実習から成る。全員が集まる全体会を3回（2泊3日または1泊2日の合宿）開催する。全体会1（5月9日～11日）は、緩和ケア病棟などでの実習に入るための準備が主目的である。全体会2（6月7日～8日）までの約1ヶ月間で、各受講者は16時間以上の実習に入る。全体会2では実習の振り返りが主になる。さらに全体会3（7月13日～14日）までの約1ヶ月間で、同じ実習先で再度16時間以上の実習に入る。全体会3では再度実習の振り返りをする。

講義とグループワークは全体会1～3で行う。グループワークでは、傾聴の基礎を確認し、ロールプレイや、実習の振り返りによって、実践力を高める。実習先は、緩和ケア病棟など真摯にいのちと向き合う現場である。講義では、臨床宗教師の理念や倫理綱領を確認し、様々なケアのあり方がテーマになる。実習やグループワークでの学びを確認する効果も期待される。プログラム全体をとおして、受講者が課題とするのは「多様な価値観を認めること」と「自分自身をみつめること」である。前者は臨床宗教師が提供するケアの基礎であり、宗教協力の基礎でもある。後者は、各受講者が学びを深めるために不可欠なワークである。

受講者については大きく異なる点がある。東北大が仏教・神道・キリスト教・新宗教の「信徒の相談に応じる立場にあるもの」を対象にしているのに対して、種智院大では「真言宗僧侶」に限定している。前者の場合は、東日本大震災後の支援活動で様々な宗教者が協力したことと、国立大学法人であるために特定の宗教に偏重しないことが理由になる。後者は言うまでもなく建学の精神に則っていることがその理由であろう。しかしながら、臨床宗教師が諸宗教の宗教協力を前提としている以上、後者においても考慮が必要となる。そこで、研修会場を天理市になる天理教教会の施設とし、さらに、天理教の「ひのきしん（日の寄進、を意味する奉仕活動）」を実習に組み入れたのであろう。この実習の意義については後述したい。

2. 学習課題と成果

募集要項によると「臨床宗教師とは、広い宗教性に基づきつつ公共空間において超宗派・超宗教の立場から人びとの『心のケア』を実践する宗教者のことです」、また「真言宗僧侶として他宗教・他宗派の宗教者と共に公共空間で活動できる臨床宗教師の養成を目指します」とある。冗長であるが確認すると、臨床宗教師は、「超宗派・超宗教の立場から、公共空間で、心のケアを提供する宗教者」である。

募集要項から学習課題を考えるとキーワードになるのは、「心のケア」「公共空間」「超宗派・超宗教」である。またこのプログラムの特徴は「実習とスーパービジョン」である。そこで、これら4点に絞って、今回の養成講座の成果を振り返ることとする。

3. 心のケア

募集要項では、敷居を下げて分かりやすくするために「心のケア」という言葉を用いているのであろうが、臨床宗教師の場合、より具体的には「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」を指す。

どちらのケアも、「どうしていいか分からない」時に必要になるケアであり、対人援助でもあるが、セルフケアが根本である。宗教的ケアのセルフケアの典型は「困ったときの神頼み」であり、真言宗でもその対人援助として祈祷などを実施している。スピリチュアルケアは「自分の価値観に基づいて支えを見つけること」であり、自分で見つければセルフケア、他者の援助があれば対人援助である。対人援助としての両ケアの違いは、主体の違いにある。祈祷がそうであるよう

に宗教的ケアの場合は宗教者、つまりケア提供者が主体になる。それに対して、スピリチュアルケアの場合は悩んでいる人、つまりケア対象者が主体になるので、ケア提供者が押しつけにならないように気をつけないてはならない。

公共空間でケアを提供する場合は、いきなり宗教的ケアが始まることはない。日本のように世俗化が進んだ国では、公共空間での宗教性の発揮は慎まれる。病院は特にそうである。故に、臨床宗教師は、まずスピリチュアルケアの姿勢を学ばなくてはならない。具体的には受容的な態度である。座学だけでは不十分なので、「傾聴」「ロールプレイ」「実習振り返り」といったグループワークとそこでもスーパービジョンが必須である。

実習先（ここでは緩和ケア病棟など）で押しつけがましい態度をとったら、実習の即時終了だけでなく、最悪の場合は大学との関係が断ちきられることもある。なので、実習前に行われる特にロールプレイでは厳しく指導される。宗教者の中には、受容よりも助言を重視する人が多い。しかし、助言は押しつけに近い行為であるため、信頼関係なしに助言をすると、ケア対象者が不快に感じることもある。だからこそ、傾聴場面のロールプレイをすることにより、各受講者の癖を明らかにして、受容的な態度を身につけるように指導しなければならない。東北大の研修でもよくあることだが、頭で受容的な態度を理解するだけでは不十分である。つまり、受講者自身は受容的な態度を実践しているように思っている、実際にはそうっていないことがしばしばある。ロールプレイは、実習前の準備として必須であることを、今回の養成講座でも実感した。

4. 実習とスーパービジョン

実習先については、必ずしも緩和ケア病棟に限定する必要はないのだが、臨床宗教師のイメージに沿った活動場所として選ばれたものと思う。実際に実習先になったのは、病院内の緩和ケア病棟だけでなく、在宅ケアを提供するクリニックや訪問介護ステーションもあった。実習中に学ぶべきことは、まずは公共空間という、宗教者にとってアウェイの現場での身の処し方である。

ここで、アウェイという言葉を用いているのは、サッカーや野球などを喩えたものであり、寺社教会という宗教者にとってのホームグラウンドに比して、管理責任者が異なる病院などをアウェイと表現している。これについては後述する。

さて、繰り返しになるがアウェイでは、宗教者といえども「偉そうに」振る舞うわけにはいかない。むしろ



▲谷山先生の講義

る必要以上に、周囲の目を気にしながら行動しなければならない。このような当たり前のことも、学習課題になる。

ところが、ただ大人しくしているだけでは実習にならない。主に患者さんとの会話を通して、スピリチュアルケア、もしくは必要に応じて宗教的ケアを提供しなければならない。寺社教会というホームであれば、一定程度、僧侶（もしくは袈裟衣）の権威が通用するが、アウェイでは多くの場合服装も限定される。ここで受講者に問われるのは、宗教的知識ではなく、対人援助スキルでもなく、むしろ態度、それも受容的な態度であり、そしてそれを支える信仰・信念である。

ほとんどすべての対人援助職は、スキル、テクニックの習得が必須である。しかし、スピリチュアルケア・宗教的ケアはテクニックで提供できるものではない。受容的な態度こそがその基礎であり、受容的な態度は小手先にテクニックで身につけることはできない。むしろ、瞑想などの修行・自己研鑽によって身につくものである。

実習後のスーパービジョンは、実習での場面を再現した会話記録を参考にする。ここでの指導内容は、スキルやテクニックではない。全くないとは言えないが、主目的は、受講者自身の対人援助における傾向を明らかにすることである。例えば、父親と折り合いが悪い人は、対人援助場面で父親のような人に出会うと、その人に父親のイメージを投影してしまう。無意識のうちに、父親を思い出し、必要以上に緊張したり、ネガティブな感情が起きてしまうこともある。そのような傾向を明らかにすることで、より多様なケア対象者に受容的な態度がとれるようにしていくことが求められる。

今回の養成講座で最も印象に残ったのは、ある受講者と祖母との関係が明らかになった場面である。その受講者は、祖母との死別を徹底して受容していないことが明らかになったので、スーパーバイザーは、限ら

れた時間の中でその死別を受容できるようにケアした。祖母の死別を受容できない、ということは、ケア対象者の死も、そして受講者自身の死も受容できない、ということにつながる。受講者自身はあまり大きな課題だと思っていなかったようだが、その様子は会話記録に在り在りと表現されていたので、他の受講者からも指摘され、ケアされた。

会話記録によるスーパービジョンの目的は、このように受講者自身の信仰や信念を明らかにすることにある。会話記録だけでなく、他の講義などを通して、受講者自身の信仰が刺激され、信仰を見つめざるを得ない場面がある。臨床宗教師というと、宗教性が弱まるのではないかと懸念している声を聞くが、そうではなく、むしろプログラムを通して信仰が深まっていくのである。

5. 公共空間

先に、ホーム&アウェイという表現をしたが、その違いを意識する機会は少ないかもしれない。特に、ホームでの法務にいそしんでいると、考える余裕もないだろう。しかし、臨床宗教師にとっては、もしくはこれに類する活動をするときには、是非とも意識しなくてはならない。その理由は単純である。人びとに迷惑をかけないため、そして、宗教者自身が退場処分にならないため、である。

お寺に祈祷をお願いに来た人に対して、僧侶が「祈祷をしてもいいのでしょうか？」とわざわざ尋ねることはないだろう。しかし、その場所が病院だったらどうだろうか？ 本人以上に、病院関係者に許可をとらなければならない。病院という場所は、宗教活動することを目的にしていないからである。このような単純なことであっても、宗教者は「自分は常に宗教者でいなくてはならない」という理念をもって生きている人が多いので、トラブルになりやすいのである。

例えば服装である。「袈裟衣で病院に行くべきか否か」を議論する僧侶の姿を見かけることがあるが、実はその議論は医療者抜きでは戯論に陥ってしまう。なぜならば、決定権は僧侶ではなく病院側にあるからである。実習において、実習生（受講者）は最も弱い立場にある。その弱い対場にある者が、「自分は僧侶だから袈裟衣で実習に臨みたい」と強く主張したらどうなるだろうか？ 答えは簡単で、実習中止、退場処分である。

また、ハウレンソウも大切である。野菜ではなく、報告・連絡・相談である。実習中は、その施設の実習担当者の指導下にあるので、分からないことや判断し



▲グループワークの様子

かねることがあれば、実習担当者に報告・連絡・相談をする。何か問題が起これば、責任をとるのは実習担当者であり、その上司や管理者なのである。もちろん、実習生（受講者）も大学も、それ相応の責任をとるのだが、現場のことは現場で責任をとらなくてはならない。

このように、実習やその後のグループワーク、講義を通して、公共空間での立ち振る舞いを学ぶ。そして、もはや公共空間と言えなくなってしまった寺社教会を、いかにして公共空間に近づけていくか、という僧侶としての課題が浮き上がってくる。受講者からは様々なアイデアが提示され、公共空間における臨床宗教師としての活動だけでなく、寺院での僧侶としての活動にも良い影響があるものと期待している。

6. 超宗派・超宗教

そもそも、超宗派・超宗教の立場を標榜するのは、公共性の担保のためである。日本では仏教が比較的多数を占めるので、特に地方では真言宗僧侶というだけで、一定の立場が与えられることもあるだろう。しかし、東日本大震災後のお弔いの活動でも問題になったように、都市部では仏教会であっても遺体安置所に入れないというケースがあった。

政教分離を旨とする公務員の発想には「少数派への配慮」が強い。一部の教団のように政治家を要する団体にも気を遣わざるを得ない。公共性を担保するには、宗教者側も一定の配慮が必要なのである。市民感覚としても、仏教だけ、よりは、仏教とキリスト教のようなコラボの方が受け入れられやすい。なぜならば、布教の疑義を払拭しやすいからである。

実際の現場でも、宗教協力は必要である。例えば真言宗僧侶が対応した患者がクリスチャンだった場合、どこまで関わり切れるのだろうか。スピリチュアルケアの段階は対応できるだろうが、賛美歌を歌うなどの特定の宗教的ケアは難しいだろう。そのような場合に宗教協力が役に立つのである。

もう一つの大きな理由は、信仰の振り返りである。海外旅行に行き、帰国して初めて気づく日本の良さがあるように、他の宗教者と対話することにより、自分自身の信仰を見つめ直すきっかけになる。

東北大のプログラムでは、多様な宗教者が受講するので、休憩時間に宗教間対話が実践される。種智院大では、それを補完するために、天理教施設での全体会と「ひのきしん」活動という特別な実習、そして毎朝の天理教本部でのおつとめにも参加している。食事時間などに、天理教信者との交流（宗教間対話）も見られた。

今回のプログラムで体験したひのきしんには二種類ある。一つは、スケジュールにある「実習」としての活動で、具体的には本部近くの花壇の花の植え替えだった。もう一つは、宿泊させてもらった施設関係者による奉仕の精神である。どちらも、「やらされている感じがしない」というのが参加者全員一致した感想だった。

果たして、本当の意味で「自ら勤んで」奉仕活動をしているだろうか、と慚愧を伴って自分自身を振り返らざるを得ないほど、ひのきしん活動は刺激的だった。各受講者自身の慈悲、利他を見つめ直し、さらにはそれを具体的な行動につなげようとする発言も聞かれた。ここでも、僧侶としての活動につながる学びがあったと言える。



▲ひのきしんに参加する受講生

7. 今後の課題

プログラム全体を通しては、各受講者が「多様な価値観を認めること」と「自分自身をみつめること」を課題として十分に取り組んだと思う。課題の内容は各受講者にとって多様なので、達成度を比較することはできないが、各自の課題を見つけ、それに取り組むという姿勢を学ぶことはできた。養成講座修了後もこの姿勢を維持できるかどうかは、各自にまかされているが、すでに東北大の修了者を中心に各地で組織されている臨床宗教師会とフォローアップ研修に参加することで、維持できるチャンスがある。これまで修了者が少ないため組織できなかった四国にも、「四国臨床宗教師会」の結成準備が始まったが、これは種智院大による大きな貢献である。

細かなことを含めて、今後の課題を確認したい。一々の講義内容については言及しないが、一点だけ申し添えて置きたい。それは、講義担当者が実践的な側面から講ずる場合と、理論的な側面から講ずる場合の違いである。ある程度のバランスは必要なのだが、このプログラムは実践的な内容であるため、実践的な側面が強調されることが臨ましい。とはいえ、理論面が完全に抜け落ちる訳にもいかないので、講師の選定や事前打ち合わせには、今後も傾注していただきたい。

グループワークについては、ほとんど本報告者が担当したのだが、改善できるならば、事前の会話記録の書き方の指導である。メールでのやりとりをするため、タイムラグが生じてしまうのはやむを得ないのだが、よりよい方法を考えていただきたい。また、前回の全体会で受講者が提示した課題を、次の全体会で丁寧に確認した点は、東北大のプログラムでも意識したいところである。これらも含めてスーパーバイザーを確保することが大きな課題である。今回は遠方の学外者である本報告者が担当したが、将来的には学内での確保（もしくは近隣での確保）が望まれる。

受講者の学びは、臨床宗教師としての活動にとどまるものではなく、寺院での僧侶としての活動にも影響を与えている。自分自身の信仰を振り返り、僧侶としての行動を振り返り、寺院の活動を振り返ることで、寺門興隆にも資することになるだろう。ここには、天理教など真言宗以外の関係者の協力があつたことを、再確認しておきたい。宗教協力は、他教団のためにもなるかもしれないが、自教団のためにもなり、宗教界全体のためにもなる。これも種智院大による大きな貢献である。

『臨床宗教師に求めるもの』

松阪市民病院：緩和ケア病棟担当
平野博



はじめに：

臨床宗教師の役割は、心のケア（スピリチュアルケア）と聞いてきた。

スピリチュアルケアとは何かが私にはわからないけれど、ケアという用語の意味について考える時、それは、何らかの関わりであり、その関わりの中の、心の関わりの事を言うのだと考えている。

その心の関わりが成立する為には、相手から選ばれなければ成立しない。

苦しみ悩む人から選ばれる為に、何がどうあれば選ばれるのか？

私は治癒を望めない癌患者さんの利用する緩和ケア病棟に勤務していて、命の終わりに近付いた病人から自分が選ばれる為に何がどうあれば選ばれるのか？という事について考えるようになってきた。

今回の原稿において、前半は、緩和ケア病棟の大まかな内容、後半は、これまでの自分の記憶をたどって、苦しみ悩む人から選ばれる臨床宗教師であって欲しい、と私が考える事を述べる。

『緩和ケア病棟の大まかな内容』：

私が現在勤務している松阪市民病院の緩和ケア病棟は、治癒を望めないと判断された癌患者さん（病人）が利用する病棟である。

病人は、癌の進行とともに、食欲が低下して、痩せて、自分の身体を思い通りに動かせなくなり、痛みや倦怠感などの不快な症状に苦しみながら生きて居られる。

病人の幾人かが「夜の来るのが怖い」「一人は寂しい」「うちに帰りたい」「ふつうに接して下さい」「何も出来なくなった私なんか生きている価値がない」などと話される。

そこでの業務の内容は、当たり前の日常生活援助と耐え難い身体的苦痛の緩和になる。

自分の身体を思い通りに動かせる時期には、“当たり前の日常生活援助の重み”は、特に健常人からは認識される事が少なく、またその重みは重視されにくい。

治癒を望めないと判断された病人は、ふだん当たり前に出来ていた事で、出来なくなる事など、その時まで思い浮かべる事さえなかった事が出来なくなっていく。

その時にはその事が、想像する事も出来ないような強い苦悩と感じられるようになるのだろうと思える。

“自分の存在している価値を自分自身で肯定出来ないという苦悩”であろうと考えられる。

そのような苦悩を抱えながら死に向かって生きる人との関わりに、緩和ケア病棟という死のケアの現場の業務の重みがある、と私は考えている。

そのような関わりを、いわゆる緩和ケアの領域では、スピリチュアルケアという用語で表現される事が多いように思えるけれど、私は多分日本人で、欧米で使われる所の、スピリチュアルケア、という用語の意味を未だに理解出来ない。

松阪市民病院緩和ケア病棟では、上述したような関わりに重みがある事を踏まえて、当たり前の日常生活援助と耐え難い苦しみ耐えられる程度になるような医療を含めた関わりが行われている。

『苦しむ人から選ばれる臨床宗教師であって欲しい、と私が考える事』：

病人の置かれる状況は“何も出来なくなった私がこのまま生きていてもいいのだろうか？”という苦悩を抱えながら、時間を過ごすという状況なのだろう、と私は想像している。

病人は自分の事を、他人にとって迷惑な存在だと評価して居られるのだろう、と私には思える。

病人はどこか、スタッフに遠慮しながら過ごして居られるように、私には思える。

.....

そのような状況に置かれる病人は、周囲の人に何を求めるのだろうか？

それを考えた時に、私はある病人（70歳代の男性）とあるスタッフの光景を思い出す。

ある病人が緩和ケア病棟に入院された。

私は、その病人から嫌われていないだろう、と思っていた。

ある日、いつものようにその病室に伺った。

ある介護福祉士（以下、CWと表現する）が床に座り込んで、小さな冷蔵庫の霜取りの作業をしていた。

霜取りをしているそのCWを病人が笑顔でからかっている光景が目に入った。

その病人の表情が、安心して居るように私には見えた。

何かを気にしながら、遠慮しながら、過ごしているような表情には見えなかった。

私はその2人を羨ましいと思った。

後に、病人の命が終わりに近付いた頃、病人はCWに話したそうだ。

『俺が死んだら、通夜に来て飯を食っていくといい。』と。

たったこれだけの事でしかないけれど、後になって、その光景や言葉が思い出されてくる。

あの光景は何を意味しているのか？

・・・・・・・・

ある時、その病人から、私に問われた事があった。

『看護師さんは、俺の部屋に何しに来るの？可哀想な俺を慰める為？』と問われた。

私は自分に問われたように思ったけれど、何も応えられずに沈黙してしまった。

後になって、その言葉の意味を考える事になった。

その病人の求めるものは、身体的苦痛が我慢出来ている状況においては、“形になる何かをして欲しい”という事を求めて居られたのではなかったのだろう、と考えた。

もちろん、当たり前の日常生活援助と耐え難い身体的苦痛の緩和を求められる事は言うまでもない。

では、その他の何を求めて居られたのだろうか？

そのように考えた時に、先に紹介した所の、“霜取りの光景”が思い出された。

あの時、痛みを緩和する為にモルヒネを飲んで生活している病人が、苦しみを忘れていくかのように、心が苦悩から解放されて過ごしているように、私には思えた。

その時に浮かんだ言葉は、“心の居場所”という言葉だった。

“もうダメだと思って居られるだろう”と私に思える病人の求めるものの一つは、心の居場所なのではないか？と考えた。

・・・・・・・・

それから何年間かが経過した。

多分、数年以上の時間が経過した。

そして知人から、ある書物が紹介された。

ケアの本質～生きる事の意味～：ミルトン・メイヤロフ著：田村真・向野宜之訳：ゆみる出版、という本だった。

P.15には、以下のような記載があった。

『ケアする事は～～～世界の中であって“自分の落ち着き場所にいる”のである。』

『他の人々をケアする事を通して、他の人々に役立つ事によって、その人は自身の生の真の意味を生きているのである。』

『この世界の中で私たちが心を安んじていられるという意味において、この人は心を安んじて生きているのである。』

・・・・・・・・

上記のような記載である。

この本を読んで、その時もある病人とCWの霜取りの場面を思い出した。

その病人とCWは、お互いに“自分の落ち着き場所に居た”のだと思った。

これから先は、“落ち着き場所”を、私は“心の居場所”と表現する事にする。

“もうダメだと思って居られるだろう”と私に思える病人の求めるものの一つは、心の居場所なのである、と以前にも増して強く思うようになった。

・・・・・・・・

ある病人とCWの光景を見た当時、その二人を、私は羨ましいと思った。

私は、そのCWを妬ましく思って、自分もそのCWのようになりたい、と思った。

自分がそうなるためには何をどうすれば、そうなれるのか？と考えた。

そのCWと話した。

そのCWの言葉の中で記憶に残る言葉を、以下に記載する。

(1)『人が苦しむのはふつうの事です。』

(2)『人が死ぬのはふつうの事です。』

(3)『何を言うのも何をするのも自分の為です。』

・・・・・・・・

(1)(2)から、“人は皆、喜んだり、苦しんだりしながら、いつかは必ず死ぬんだから、死に逝く病人を目の前にして、私はその人を可哀想と思わない”、という感覚が生まれそうだ。

病人としては、このような感覚の身に付いている人からは同情されていないんだ、と思えて、そのようなスタッフには遠慮する事なく過ごせる事につながるだろう。

但し、私にその感覚は身に付いていない。

(3)について、次のように私は理解している。

私は心の奥底に、親切で良い人である事を他人に見せたい、知らしめたいというような、自分を飾りたい意識を持っている。

何かを口にする時には、自分を飾っている。

医療従事者の私が病人に対して、“～してあげる”と言う事があるとすると、病人に向かって、私を“良い人だと思わせたい”という意識があると考えられる。

時には、“私を良い人と思えよ！”という、強要的と感じられるような物言いをする事もあるかもしれ

人間である限り、“私は良い人”、“私は自分が一番可愛い”という、心の奥底にある意識はなくならないだろうけれど、少なくとも、そのような意識がある事の自覚くらいはしておきたい。

言い換えると、“自分が自分を飾りたいから言うんだ、とか、するんだ”という自覚を持ちたいという事になる。

そのような自覚を持つ事によって、“あなたの為に～する”もしくは“あなたの為に～してあげる”という事を口にしなくなるだろう。

そのような自覚を持つ事は、自分自身を知る事だと私は考えている。

そうする事によって、病人から嫌われる事なく、選ばれる事につながるだろう、と考えてきた。

但し、この感覚も、私に身に付けるのは難しい事であるけれど、忘れないで記憶に留める事くらいは出来そうな気がしてきた。

.....

このように考えてきて、私自身が、CWのような存在になれる可能性があるのなら、少なくとも、(1)

(2) (3) くらいの言葉を忘れないでいる事が、病人との関わりの中で、私自身が心の居場所に居る事が出来るようになるのかもしれない、と思うようになった。

.....

私の記憶の中では、たった一人、たった一度だけ、“心を安んじて、心の居場所に居る”と思える場面に出遭って、その光景を見て、その雰囲気を感じた出来事、だと私は思っている。

一度だけそのような場面に出遭ったからという理由で、自分一人の思い込みから、それだけが正しくて、それだけに価値がある、とは言えない。

.....

“もうダメだと思って居られるだろう”と私に思える人との関わりの中で、病人の求めるものについて、“心の居場所（落ち着き場所）”なのであろう、と思う事があったので、ここに紹介した。

まとめ：

医療従事者の私が医療行為について考えるのは日常茶飯事ではあるけれど、“良かったね、という言葉に代表されるような、改善の方向に向ける手段”を見つけれなくなった時に、悩む事がある。

“苦しんで死ぬ方向に向かう病人が何を求めているのか？”を考える事さえ思い浮かばない事も私にはある。

医療行為を含めてどんな関わりをすれば、私が苦しむ病人に出遭って、自分の心が苦しまずに済むのか？を考えている自分が居る。

自分が苦しまないで済む方向に向かって、自分の為に考えている自分が居る。

ある時、介護福祉士と病人の光景を見てから、病人の求めるものは、心の居場所だろうと考えるようになった。

そしてもし自分がそれを提供出来るのなら、もっと言えば、それを自分が提供したいと思うのなら、何をどうすればそれが出来るのか？を考えた時に、CWと話した事が思い浮かぶ。

先に述べたように、(1) (2) (3) の3つくらいは忘れないでおきたいと考えた。

(1) (2) の感覚は容易に身に付かないにしても、知識としてくらいは記憶に留めておきたい。

また(3)『何を言うのも何をするのも自分の為です。』という言葉も、心の奥底にある自分を飾る意識があるから生まれる言葉である事も、自分の為に忘れないでおきたい。

別の表現をすれば、“私はこれだけの者です”というような自覚を持って病人の前に出る事になる。

そうする事によって、病人に心の居場所を感じて貰えるのなら、病人が心を安んじて過ごす事になりやすいのではないかと考えている。

飾りはなくならないにしても、私が自分の心の中の飾りを自覚する事によって、病人の心の居場所が出来たら、その時には病人に私の心の居場所も作ってもらえると思う。

但しこの事に、医療の“エビデンス”と呼ばれるような根拠は示せない。

臨床宗教師の方々は皆、宗教家であって、(1) (2) (3) くらいの事は、ふだんの日常生活の中で当然の事と認識して居られる方々である、と私は考えている。

動けなくなつて生産性の低下していく病人の傍に居て、(1) (2) (3) だけではないにしても、そのような感覚を身に付けた人が、傍に居てくれるのなら、“悩み、苦しんでもいいんだ”と病人から思ってもらえるのではないだろうか。

臨床宗教師の方々には、自分自身の為に、そして同時に病人という他人の為に、心の居場所を感じられる存在であって欲しい、と私は思う。

おしまい。



種智院大学臨床宗教師
養成第一期生をおくって

天理教浪華分教会

上田禮子



会場受け入れの上で心配していたことがすべてうまく運んだ今は、本当に有難い気持ちでいっぱいです。親神様、教祖はいうまでもなく、受け入れ側とは違った心配が尽きなかったと思います主催者の松本先生をはじめ、遠く関西の片田舎にお越しになられた谷山先生の御尽力、またお手伝いに来て下さった臨床宗教師の先輩の諸子の縁の下の方があってのことでした。

昨年、松本先生から会場の受け入れのお話を聞かして頂いているその時の私の頭をめぐったのは、部屋15人ぐらいならOK、20人でも来い！蒲団OK、ああ、シーツ洗っとかなくちゃ、食事？炊事本部があるからOK！だけど講義をするところが大丈夫かな？線路沿いだからうるさいんだな、どこか講義場所だけでも借りられないかな？というところまで頭が働いていました。ですので松本先生の話が終わるや否や、即座にいいですよ、光栄です、とまで言っていました。じつは私は、それを待っていたのかも知れません。

そして松本先生が読んでいたように、私も各大学が臨床宗教師養成コースを取り入れるならば、他の宗派の会場で開催する、あるいは他の宗派の講義をプログラムに入れる、他の宗派を見学したり、フィールドワークをしたりする、あるいは他宗派の信者と対話をするといったプログラムがなければ、東北大学のような臨床宗教師を育てられないと思っていました。ので、松本先生が、一番宗教間体験をするには、新宗教である天理教にと思われたのは非常に素晴らしい目の付けどころではなかったでしょうか。しかも天理は種智院に近い、＜これは違っていました、受講する方は遠くからいらっしゃいました＞、本部で直接に信者の様子や実態を見ることが出来るし宿泊施設がある、食事設備も整っている、でかい風呂もある、しかも夜はめっぽう早く、ネオンは灯らない、朝は太陽と共に起きるといった、もう一般には考えられないような土地柄だからです。ここにくるだけでもカルチャーショックでしょうか。

責任上、松本先生は、すぐに天理を見学に来られました。私は、先生が選択しやすいように、できるだけ多くの施設をご案内しました。神殿、教祖殿、

祖霊殿は勿論のこと、初めてお帰りになる方に分かりやすい天理教のお話、基礎講座をお聞き頂き、またマルチ映像で紹介した天理教の紹介を視聴して頂き、炊事本部の内部を見学し、さらにその食事を本部第五食堂で食して頂きました。また各国の宗教を知るために有効な生活文化の物を収集した天理参考館も見て頂きました。時間の関係で、天理大学図書館と天理よろず相談所病院を見学できなかったのが残念です。そうした全体をご覧いただいて、またできるかぎりの資料をお渡しして、先生の思い描く種智院大学の臨床宗教師養成のプログラムをちょっと他の所にはないものにしていただく後押しができればと、私は勇んできました。

そのうち、先生からひのきしんというものを体験したいのだが、神殿の回廊拭きなどはできるのか、どうかというお話がありました。東北大学で巡礼をしましたが、それにかわるものをお捜しなのかなと思いました。もちろん回廊拭きは、だれでもいつでも出来ますし、病気や事情のお願い事があれば、夜中でも回廊を拭いている人は、おりますが、私は何かもっとみんなで協力して楽しいひのきしんがないものかとあためてみました。境内係や天理図書館、営繕部造園課などに聞いてみるとともに、思いついたのが、天理高校二部の農事課のひのきしんです。ちょうど夏にかけて神苑周りに新しい花を植栽するので、そのひのきしんをお手伝いして下さると有難いと、あちらもとても嬉しそうな声で答えてくれました。これは、すごいヒットでした。次の月に来た時に、植えた花の育ち具合を見ることが出来、その成果を確かめることが出来たからです。そして、若い女学生とともにできたことが、女学生にとっても忘れられないひと時でした。

本部での朝のお勤め、神苑でのひのきしん、本部食堂での食事、千人風呂入浴、また本部の墓地なども見て回る事ができました。



▲天理教本部の朝勤めに向かう受講生たち

プログラムは、割合的に他宗派、天理教の時間も多く取って頂き、内心驚きました。なにしろ朝の四時半から毎朝、本部の朝勤めに行くことからして、こちらのほうがびっくりしました。きちんと手の振り方やお地のうたまでしっかり覚えて下さって、神殿の一番前で作務衣、数珠、スキンヘッドでお勤めをするとは、なんと暖かい、寛容な交流なのでしょう。こんな交流は初めての経験でした。本部の役職の方々も、＜今日はなんだかお坊さんが多いね＞と笑顔でおっしゃっていらしたそうです。

しかし、多くの僧侶の方々には、ここまでののを遠慮したり、怪訝に思ったりするのが当然でしょうが、こうした他宗教の施設にどっぷり入って、その宗派の儀式を体験できるのは、相当に心の柔らかさと宗教的理解力、調和力、つまり宗教的総合力がある方々だと感じました。また、神殿でおつとめをした後、「天理教は非常にシンプルである、だからこそそのエネルギーを感じる」と口々に受講者のかたがおっしゃっていたことには、内の者には到底感じなかった点で、目から鱗でした。宗教間対話については、顔をつきあわせてディスカッションしたわけではありありませんが、こうした日常の作法で、また食事をする時、懇親会の時などにできたのではないかと思いますし、その方がよりよいのかもしれない。

ちょうど、こちらもひのきしんの青年さんたちがいたり、修養科生がいたりしたので、大いに宗教間交流がなされたと思います。

さらに一番おもしろかったのは、松本先生が、同期の谷山先生のことを「会話記録で、こんなに機嫌のいい谷山、見たことがない」とおっしゃっていた裏話です。皆さんも知る通り、会話記録では、谷山先生はピリリとした雰囲気醸し出し、我々は針の筵に座っているような緊張を覚えます。そして、時



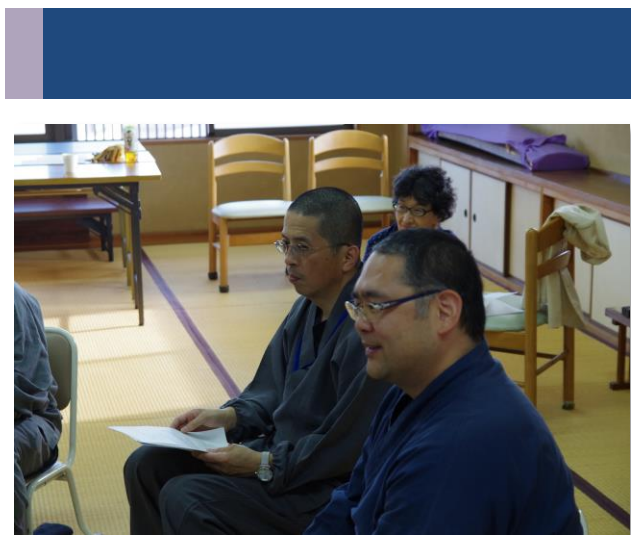
▲天理本通りにて

に自分の心を深く見つめなかったり、人様の苦しみや辛さから逃げようとする時に、大喝をいれます。それを皆は「谷山先生、キレた！」といいます。その先生が、機嫌が良かったとは、実に愉快でありました。受講者の方の柔軟さ、強い求道の現われでもあり、それだけ皆さんが自分の壁を破る努力をされたからでもあります。でも谷山先生のように、感情を入れずに、ニュートラルに、時には雷のように＜雷とは、原義は神鳴りなんですって＞大喝をいれて成長の後押しをしてくださる師は今時おりません。特に、我々宗教家ともなれば、なかなか叱ってもらえることがなくなり、時には横柄になることもあります。そんな師にめぐりあえた私は、本当に勿体ない、有難いなあと痛切に思いました。

今後も皆さま方と、手に手を取り、日本の将来、世界の未来に臨床宗教師として確かなケアを提供できるよう交流をしたいものです。ありがとうございました。



▲天理教の「手おどり」に参加する受講生



第1回臨床宗教師養成講座実施報告

臨床密教センターでは、前述のように平成28年5月から7月にかけて第1回の臨床宗教師養成講座を実施しました。カリキュラムについては、特に東北大学の谷山洋三先生の指導の元、現在東北大学で実施されている臨床宗教師研修（特に第7期）のカリキュラムに準じたものとなっています。一方で、当センターの養成講座では東北大学を始めとする他機関で行われている講座と異なり、受講者を真言宗僧侶に限定しました。その為、カリキュラムには真言宗教義に関するもの、異宗教理解・交流に関するものを設置していることが大きな特徴です。

・ ・ ・ 研修データ ・ ・ ・

期間

全体会 1 2016年5月9日（月）～11日（水）

全体会 2 2016年6月7日（火）～8日（水）

全体会 3 2016年7月13日（水）～14日（木）

全体会会場

天理教浪速分教会信者詰所（奈良県天理市）

実習先

小笠原内科（岐阜県岐阜市）

医療法人聖徳会が運営するクリニックと訪問看護ステーション・介護支援サービスによる在宅緩和ケアを行う。緩和デイケアも実施。独居の看取りにも傾注しているので、ボランティア多数登録。

西栄寺訪問介護福祉事業 お寺の介護 はいにこぼん（大阪府大阪市）

「宗教法人としての訪問介護事業」を行う。サービス管理者の吉田敬一師は、第1回臨床宗教師研修修了者。

ささえ愛よろずクリニック（新潟県新潟市）

医療法人社団ささえ愛よろずが運営する内科・心療内科・精神科クリニックを中心に、高齢者住宅、デイサービス、ショートステイ、訪問看護、訪問介護、



▲天理教本殿前での記念撮影。

朝づとめは毎日日の出とともに行われ、信者さんが本殿で集まっておつとめをされます。



在宅終末期ケアを行う。宗教者が定期的に患者のケアに関する活動をしている。

松阪市民病院緩和ケア病棟（三重県松阪市）

松阪市が運営する市民病院内にある院内独立型の緩和ケア病棟。臨床宗教師が活動している。

長岡西病院ビハーク病棟（新潟県長岡市）

医療法人崇徳会が運営する仏教系緩和ケア病棟。病棟内に仏堂があり、朝夕に読経の時間がある。常勤ビハーク僧の他に、十数名の地元の僧侶がボランティアとして関わる（超宗派）。

沼口医院（岐阜県大垣市）

医療法人徳養会が運営するクリニックと、訪問看護ステーション・アミターユスにより、在宅緩和ケアを行う。

臨床宗教師が常駐している。

研修修了者

岩佐隆昇 徳島県 高野山真言宗
上原慎勢 京都府 泉涌寺派
宇喜多隆充 岡山県 高野山真言宗
田口皓基 岡山県 大覚寺派
童銅啓純 香川県 御室派
原田照久 佐賀県 智山派
峯島秀暢 東京都 高野山真言宗

研修スタッフ

松本峰哲 真言宗御室派、種智院大学臨床密教センター長 東北大学臨床宗教師研修第6期修了生
鷺尾千賀子 東寺真言宗 種智院大学臨床密教センター 事務担当 東北大学臨床宗教師研修第7期修了生
上田禮子 天理教 東北大学臨床宗教師研修第5期修了生
谷山洋三 真宗大谷派 東北大学実践宗教学寄付講座准教授
打本弘祐 浄土真宗本願寺派 龍谷大学文学部専任講師
西郊良俊 天台宗 東北大学臨床宗教師研修第7期修了生
木村雅恵 天理教 東北大学臨床宗教師研修第3期修了生
坂野大徹 浄土宗 東北大学臨床宗教師研修第7期修了生
佐々木了慈 浄土真宗本願寺派 龍谷大学臨床宗教師研修修了生



【プログラム内容】

講義科目

「臨床宗教師の理念」（谷山洋三先生）
臨床宗教師を目指すにあたって、その成立や今に至るまでの経緯をたどる。また、臨床宗教師の理念を学び、宗教者が臨床宗教師として活動するときに必要な宗教間の協力・公共性・自分自身を見つめることなど諸事項を確認した。

「精神保健福祉」（真柄希里穂先生）
精神保健及び精神障害者福祉に関する法律について触れ、ケア提供者として気を付けなければならないポイントを学ぶ。また、看取りに関するデータをもとに宗教者の役割を再考した。

「臨床宗教師の倫理」（谷山洋三先生）
臨床宗教師がケア対象者に対して守るべき倫理「臨床宗教師倫理綱領」の内容を確認し、公共空間で活動するために遵守すべき守秘義務、布教伝道を目的としない姿勢を学んだ。

「宗教学」（上田禮子先生）
真言宗にとっては「他宗教」となる天理教の教義・死生観を学び、臨床宗教師として活動するために必要な他宗教への理解を深めた。

「ひのきしんの意味」（上田禮子先生）
フィールドワークとして取り組む天理教の奉仕活動「ひのきしん」を行うにあたっての説明。単なる奉仕活動ではなく、その根底にどのような教義が流れているかも学んだ。

「緩和ケア」（平野博先生）
緩和ケアとは何かについての理解を深め、講師の実体験に基づき、末期がん患者に接する緩和ケアの現場の話を通じて、ケア対象者に対してできることについて考えた。

「スピリチュアルケア」（谷山洋三先生）
「痛み」の中でも「病氣」とは異なる「スピリチュアルペイン」があることを踏まえ、それを和らげるためのスピリチュアルケアの基本姿勢を学んだ。

「会話記録の作成法」（谷山洋三先生）
ケア対象者との会話を振り返る会話記録の作成に向けての解説。

「宗教的ケア」（谷山洋三先生）
スピリチュアルケアとは異なる宗教的ケアがどういったものであるかを学び、宗教者としてのケア、宗教的資源の活用について理解を深めた。

「実習先説明」（谷山洋三先生）
実習先としてご協力いただく施設についての事前学習。また公共空間で活動する際の諸注意を確認した。

「臨床密教学」（松本峰哲先生）
密教の教義を宗祖弘法大師の著作などをもとに再確認し、真言宗僧侶が現代において密教をどのように生かすことができるか考えた。

「グリーフケア」（谷山洋三先生）
喪失と悲嘆（グリーフ）について学び、それを癒すためのケアとして宗教者の「死者と生者をつなぐ」機能（葬儀や仏壇）が役立つことを理解した。また、悲嘆に伴う行動的・生理的反応や「あいまいな喪失」、治療のためのガイドラインについても学んだ。

「仏教福祉」（佐伯俊源先生）
仏教の經典に基づく救済思想について確認し、宗祖弘法大師や歴代の僧侶も様々な福祉実践を行ってきたことをたどった。その上で、そういった社会的実践が「方便」という密教の根源にあることを学んだ。

「公共性の確保」（谷山洋三先生）
臨床宗教師の活動の場は公共空間である。そのことを踏まえ、社会常識を守ること、各自が公共性を身に付けることの重要性を確認し、東日本大震災の際、公共空間において宗教者がどのような活動をしてきたか実例を挙げて考察する。

「社会福祉」（近棟健二先生）
社会福祉とは何か、また高齢化に伴う介護福祉の現状を学んだ。実際に臨床宗教師が現場で活動する際深くかかわる介護に関する保険やサービス、今後予想される状況について理解を深めた。

「人権擁護」（上田禮子先生）
講師ご自身の体験をもとに、子供の人権について、臨床宗教師として何かできるかを改めて考えた。

「民間信仰論」（松本峰哲先生）
現代日本において宗教の教義と一般に信仰されていることに乖離があることを確認し、臨床宗教師は自



▲ひのきしん終了後の集合写真

らの信仰を保持しつつ他者の信仰に寄り添う必要があることを学んだ。

「宗教間対話」（村上泰教先生）
「世界宗教者平和会議（WCRP）」での講師の実際の活動に基づいて、世界には様々な宗教対立があることを踏まえ、なぜ争いが起こるか、異なった宗教間でどのように対話していくかを考んだ。

グループワーク

「オープンダイアログ」（真柄希里穂先生）
講師をファシリテーターとして、様々な技法による安全な空間でのコミュニケーションを体験し、フィンランドで開発された統合失調症の介入技法「オープンダイアログ」を学んだ。

「傾聴」（谷山洋三先生）
2人一組になり、人の話に耳を傾ける傾聴を実際に行ってみて、フィードバックを行う。また、傾聴する際の姿勢や心構えについても学んだ。

「実習振り返り」（松本峰哲先生）
第2回・第3回全体会の初めに、前回の実習先での体験・気づきについて発表し、研修生同志で共有した。

「ロールプレイ」（谷山洋三先生）
2人一組になり、配布されたプリントに記載してある状況の中から一つ選択し、話し手と聞き手の役を演じる。そして、実際に話してみても話し手はどのように感じたか、聞き手はどういった感情が起こったかなどを振り返った。



「会話記録」（谷山洋三先生）

実習先での会話記録を、臨床宗教師、ケア対象者、ナレーション役を決めて読む。会話記録作成者は必ず自分がかかわったケア対象者のセリフを読み、どのように感じたかを共有した。

「研修振り返り」（松本峰哲先生）

それぞれの全体会の最後に、研修を振り返り、感じたことを共有した。

実習科目

「ひのきしん」

天理教の奉仕活動に参加させていただく。2016年度は天理高校の生徒とともに花壇の植え替えを行った。

「日常儀礼」

真言宗または天理教の朝勤行・夕勤行を行い、お互いに理解を深めた。

「現場実習」

それぞれの全体会の間に、実際に施設で傾聴を行うとともに、医療現場の実際を体験した。また、その際の会話に基づき、会話記録を作成した。

【全体会日程】

全体会1

5/9月

- 9:30 天理駅集合→天理教浪華分教会信者詰所へ
 10:00 - 11:00 オリエンテーション 60分 松本峰哲
 11:10 - 11:40 講義「臨床宗教師の理念」
 30分 谷山 洋三
 11:40 - 12:40 昼食・休憩
 12:50 - 14:20 グループワーク「オープンダイアログ」 90分 真柄 希里穂
 14:30 - 16:00 講義「精神保健福祉」 90分
 真柄 希里穂
 16:10 - 17:10 講義「臨床宗教師の倫理」
 60分 谷山 洋三
 17:10 - 19:10 入浴・食事
 19:10 - 20:10 講義「宗教学」 60分 上田 禮子
 20:15 - 20:30 日常儀礼（真言宗） 15分

5/10火

- 5:00 - 6:00 朝づとめ（天理教） 20分
 6:00 - 7:00 朝食・休憩 60分
 7:00 - 8:00 グループワーク「傾聴」 60分
 谷山・松本
 8:10 - 8:40 講義「ひのきしんの意味」
 30分 上田 禮子
 移動
 9:00 - 12:00 フィールドワーク「ひのきしん」
 180分
 12:00 - 13:30 昼食・移動・休憩
 13:40 - 14:10 グループワーク「ひのきしん振り返り」 30分 松本 峰哲
 14:20 - 15:50 講義「緩和ケア」 90分 平野 博
 16:00 - 17:00 講義「スピリチュアルケア」
 60分 谷山 洋三
 17:00 - 19:00 入浴・夕食
 19:00 - 19:30 講義「会話記録の作成法」
 30分 谷山 洋三
 19:40 - 20:40 講義「宗教的ケア」 60分
 谷山 洋三
 20:45 - 21:00 日常儀礼（真言宗） 15分

5/11水

- 5:00 - 6:00 朝づとめ（天理教） 20分
 6:00 - 7:00 朝食・休憩 60分

7:00 - 8:00 講義「実習先説明」 60分
松本峰哲
8:10 - 9:40 グループワーク「ロールプレイ」
90分 谷山 洋三
9:40 - 10:10 休憩
10:10 - 11:40 グループワーク「ロールプレイ」
90分 谷山 洋三
11:40 - 13:10 昼食・掃除・休憩
13:10 - 14:10 研修振り返り 60分 松本 峰哲
14:15 - 14:30 日常儀礼（真言宗） 15分
解散

全体会 2

6/7火

9:30 天理駅集合→天理教浪華分教会信者詰所へ
10:00 - 10:15 日常儀礼（真言宗） 15分
10:30 - 12:00 講義「臨床密教学」 90分
松本 峰哲
12:00 - 13:00 昼食・休憩
13:00 - 14:10 グループワーク「実習振り返り」
70分 松本 峰哲
14:20 - 15:50 講義「グリーンケア」 90分
谷山 洋三
15:50 - 17:50 入浴・夕食・休憩 120分
17:50 - 19:20 講義「仏教福祉」 90分 佐伯 俊源
19:30 - 20:30 講義「公共性の確保」 60分
谷山 洋三
20:40 - 20:55 日常儀礼（天理教） 15分

6/8水

4:30 - 5:30 朝づとめ（天理教） 20分

5:30 - 6:30 朝食・休憩 60分
6:30 - 8:30 グループワーク「会話記録」
120分 谷山 洋三
8:30 - 8:50 休憩 20分
8:50 - 10:20 グループワーク「会話記録」
90分 谷山 洋三
10:30 - 12:00 講義「仏教福祉」 90分 近棟 健二
12:00 - 13:30 昼食・掃除 90分
13:30 - 14:30 研修振り返り 60分 松本峰哲
14:35 - 14:50 日常儀礼（天理教） 15分
解散

全体会 3

7/13水

9:45 天理教浪華分教会信者詰所 集合
10:00 - 10:15 日常儀礼（真言宗） 15分
10:25 - 11:25 講義「人権擁護」 60分 上田 禮子
11:35 - 12:05 グループワーク「実習振り返り」
30分 松本 峰哲
12:05 - 13:05 昼食・休憩 60分
13:05 - 14:05 グループワーク「実習振り返り」
60分 松本 峰哲
14:15 - 15:45 講義「民間信仰論」 90分
松本 峰哲
15:45 - 17:30 入浴・夕食・休憩 105分
17:30 - 19:00 講義「宗教間対話」 90分
村上 泰教
19:05 - 19:20 日常儀礼（天理教） 15分
19:30 - 懇親会

7/14木

4:30 - 5:30 朝づとめ（天理教） 20分
5:30 - 6:30 朝食・休憩 60分
6:30 - 8:30 グループワーク「会話記録」
120分 谷山 洋三
8:30 - 8:50 休憩 20分
8:50 - 10:20 グループワーク「会話記録」
90分 谷山 洋三
10:30 - 11:30 研修振り返り 60分 松本 峰哲
11:30 - 13:00 昼食・掃除 90分
13:00 - 14:00 修了式 60分
解散



受講生の感想

(第1回臨床宗教師養成講座)

種智院大学 臨床密教センターにとっては初めての研修では、7名の受講生がともに学びあいました。全体会最終日に語っていただいたコメントをご紹介します。

岩佐 隆昇さん
(高野山真言宗)



今回の研修では、天理教の皆様のあたたかいご支援に深く感謝申し上げます。

研修を通して、自分と他者とは、必ずしも思いがいっしょでないこと、また、それぞれに見る角度が異なることも勉強いたしました。ですから、自分の想いを他人に押し付けないということも学びました。

病院実習では、患者さんとの間において、寄り添うことの難しさ、また、沈黙することの大切さを学ぶことができました。いろいろ反省してみますと、沈黙に耐えることは、傾聴の基本の一つであるということがよく解りました。また、帰りまして、沈黙について調べてみますと、「維摩経」の中で、文殊菩薩と維摩居士との関係において、そこには、沈黙の尊さについて述べられています。自信をもって、事に当たれるよう勉強したいと思います。

なお、今後は松阪市民病院のボランティア登録いたしましたので、通って研鑽を積みみたいと考えております。

上原 慎勢さん
(真言宗泉涌寺派)



研修では、自分を見つめることの重要性に気付かされるところとともに、自分が人に考えを押し付けるところがあることに気付かされました。これは自分の今後の課題であり、意識して自分を見つめる機会を持ってゆきたいと思います。

また現場実習では、看護師さんやお医者さんと話す機会があり、現場の人々がどのようなことを考えているのかを知ることができ、とてもいい勉強になりました。現場の方々が患者さんのために一生懸命やっている所に、宗教者がうまく関わることができればいいなと思いました。

今後は、この研修の修了をスタートとして、自分が関わっている終活塾の活動の延長線に臨床宗教師があると思うので、まずは身近な地域から、地域の包括支援センターなどで、少しずつ活動を広げてゆきたいと考えています。

宇喜多 隆充さん
(高野山真言宗)



全体として、研修はとても楽しく受講することができました。天理教浪速分教会の上田さんをはじめ、天理教の皆さんのおかげがあったからこそ、このような素晴らしい研修ができたのだと思います。

研修では、自分を振り返る作業が苦手で、今までそこから逃げていたことに気付きました。会話記録を作る中で、自分自身を振り返りながら、自分自身を理解するきっかけになりました。これからも自分自身を見つめる行為は続けてゆきたいと思います。

今後はまずは檀家さんに寄り添い、それから介護現場でのヘルパーさん、患者さんへの寄り添い、そして市役所の心の相談室に臨床宗教師として関わってゆくことを目標にしたいと考えています。

田口 皓基さん (高野山真言宗)



今回の研修、病院実習ではとてもキツイことを言われた事もあったが、怒られることも貴重な時間であり、自分を見つめるいい機会になりました。

今回研修を受講するにあたり、自分が臨床宗教師を目指す理由がぐらついているところがあったが、研修・実習を通して其のことをしっかりと考える事ができ、今後も臨床宗教師をやっていこうとする決心ができました。自分をこんなに見つめる機会はこれまでありませんでした。また、普段他宗教の方々と付き合うことがないので、今回天理教の施設で天理教の皆さんにお世話になりながら研修をできたことはとても良い経験でした。

今後は近隣の臨床宗教師会に入って活動を続けたいと思っています。またデイサービスや、介護施設に関わってゆきたいとも考えています。そしてまずは、務めているお寺でお茶所やお参りの方に臨床宗教師として関わる時間を作りたいと思っています。

童銅 啓純さん (真言宗御室派)



当講座の受講の動機は「慈悲」でした。

昨年あたりから「慈悲」について思案していましたが「慈悲」は見えず、悩んでいるところに本講座の募集を知ったのです。

確かなシラバスが用意され実習先の先生、多方面の講師、学友、他宗教から多くを学び充実の講座でした。

数例の研修実習ではありますが緩和病棟での実体験は既知を越える「慈悲」があり、迫真のナマの命は私にとっては衆生済度の最前線「慈悲の道場」でした。当講座関係各位この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

原田 昇久さん (真言宗智山派)



研修に参加する前は、臨床宗教師は僧侶なら問題なく出来るものだと考えていたが、研修は体力的にもきつく、また研修中に臨床宗教師の活動におけるホームとアウェイの違いを学び、普段の住職の感覚ではいけないことに気付かされました。

また研修では、天理教のひのきしんや、朝のお勤めに参加させていただき、仏教にはない天理教の力を感じました。特に天理教では若い人や、子連れの人が多くお勤めに参加しているのが印象的でした。ひのきしんでは、一緒に活動した方の心から湧き出る奉仕の気持ちを感じました。

今後は、地元の臨床宗教師会に参加して、出来る範囲で活動するとともに、病院だけでなく、色々な所で働いている人の心の問題にも対応できるようになりたいと思います。

峯島 秀暢さん (高野山真言宗)



このたびの臨床宗教師研修では久しぶりに修行を行ったようなしんどい思いも感じましたが、自分自身を見つめるいい機会になりました。

会話記録を基にしたグループワークでは、講師を始め受講生の皆さんから意見をいただいて、他者から客観的に見てもらえる機会の得難さを感じ、ありがたく思いました。その中で、自分では気づかなかった癖を知り、普段のコミュニケーションのありかたについて考えさせられました。

病院実習では、ビハラー僧の方から志の高さを感じ、看護師・介護士さんの患者に寄り添う姿勢に感銘を受けました。私自身、初対面の患者さんにどぎまぎして、心を開いて接することに困難を覚えましたが、買い物に付き添ったり、歌につきあったりなどしてやっと少し心を通わすことが出来たように思います。患

者さんとの関係性をつくるには何らかのきっかけが必要で、それらの積み重ねの中で信頼関係を築いていけるのではないかと思います。

これからは傾聴能力を高めるために、どこか施設か、カフェ・デ・モンクのような場に参加して研鑽を積みたいと思います。また、医療関係者に会う機会があれば、宗教者の受容についてリサーチしてみたいとも考えています。そして何よりも、心を開いて接することができるように「人を好きになること」を心がけたいです。

ご指導いただきました諸先生方、貴重な経験の場を与えて下さった病院、教場の皆様そして一緒に学んだ受講生の皆さんに深く感謝申し上げます。

研修を終えて

松本センター長



▲全体会1のひのきしんで植えたマリーゴールド。
全体会3では大きく育っていました。

今回の研修では、受講生を真言宗僧侶に限ったことが特徴であると同時に問題でもありました。それは臨床宗教師の最も大きな特徴である宗教者がそれぞれの宗教の枠を超えて協力するという「宗教協力・対話」が、真言宗の僧侶だけでは学べないのではないかということでした。この問題を解消するため、合宿形式で行う全体会を、東北大臨床宗教師研修第5期修了生の上田禮子様のご協力により全日に渡り奈良県天理市にある天理教浪速分教会様の信者詰所にて行わせて頂きました。そして全体会中は毎朝、天理教本殿で行われる朝のお勤めに参加させて頂き大変貴重な宗教体験をさせて頂きました。またカリキュラムにおいても天理教の教義とそれに基づいた社会実践活動についてレクチャーして頂くと同時に、天理教独自の実践活動である「ひのきしん」を天理教の皆さんと共に行わせて頂きました。さらには全体会中、浪速分教会の皆様には色々と研修をお手伝い頂き、結果として研修生の皆さんにとっては、天理教という宗教、そして天理教の方々との非常に濃密な宗教間対話が実現しました。さらに今回の研修では、他にも東北大、龍谷大の臨床宗教師研修修了生である天台宗、浄土宗、浄土真宗の方々にもお手伝い頂き、結果として受講生にとって広い宗教間対話の実現する結果となりました。また、天理教施設に泊まり込んでの研修自体、周りの雰囲気から受講生の皆さんは自分とは違う宗教の雰囲気を体験する機会となったようです。

【今後の研修について】

平成29年度には第2回の養成講座の実施を計画していますが、基本的なカリキュラムについては、今年度に準じたものにしたいと考えています。ただ、カリキュラムの詳しい内容については、実習の充実や、それに伴う研修期間の延長なども視野に入れて現在検討中です。

また募集する受講生については、基本的には真言宗僧侶限定にする予定ですが、既に他宗教・他宗派の方からの受講希望のお話も頂いており、受講生の対象拡大について現在検討を進めています。

最後に、臨床宗教師は宗教・宗派の違いを超えて協力しながら活動するわけですが、当然ながら1人の宗教者が全ての宗教・宗派の教えをカバーするわけでありません。他宗教の方々と共同して活動する中で、様々な場面ごとに自分の宗教ならこんな時どう考え、どう行動すべきかを考える機会が必ずあるはずであり、場合によっては自分の信仰では対処できず、他の宗教者に委ねる場面もあって然りだと思います。そんな時、自分の信仰する宗教に対するブレない教義理解は絶対に不可欠であり、これがブレてしまうと、臨床宗教師である以前に宗教者ではなくなってしまいます。また悪い意味で自分の信仰する宗教の教義からは導き得ない解釈によって行動することによって、新たな「臨床宗教師教」のようなものが生まれてしまうのではないかと危惧しています。臨床宗教師の活動を教義に結びつけて考えることは、将来臨床宗教師の数が増え、海外のチャプレン制度のように様々な場所で多くの宗教者が連携して活動する時が訪れた時に必ず必要となると考えており、このことを意識したカリキュラム編成については今後も力を入れてゆきたいと考えています。



《新聞報道》

- ・佛教タイムス（2015年1月22日） 種智院大学 臨床宗教師の養成開始 新設の密教センターで秋から
- ・中外日報（2015年10月28日） 「臨床宗教師は同行二人」 臨床密教センター開設記念講座 松本センター長が講演 種智院大
- ・佛教タイムス（2015年10月29日） 種智院大臨床密教センター 公開講座など活動本格化 来年5月 臨床宗教師の養成開始
- ・中外日報（2015年11月13日） 種智院大学臨床密教センター 臨床宗教師口座開設へ
- ・佛教タイムス（2016年2月11日） 臨床宗教師養成講座を開講 3月から受講者を募集 種智院大学臨床密教センター
- ・六大新報（2016年2月15日） 種智院大臨床密教センター 臨床宗教師養成講座開講
- ・中外日報（2016年5月18日） 真言宗僧侶対象に 7人、短期集中で学ぶ 種智院大臨床密教センター
- ・佛教タイムス（2016年5月19日） 種智院大臨床密教センター 臨床宗教師の養成を開始 奈良 天理教浪華分教会で研修
- ・産経新聞（2016年7月7日） 中立重んじ臨床宗教師養成 種智院大プログラム／真言宗僧侶が天理教儀礼「体験」
- ・佛教タイムス（2016年7月21日） 真言宗の臨床宗教師誕生 種智院大学臨床密教センター 7人が天理教施設で研修終え

臨床宗教師関係団体

- 日本臨床宗教師会 sucj@g-mail.tohoku-university.jp
(事務局)
- 北海道東北 ht.rinshushikai@gmail.com (事務局)
- 関東 kanto.rinsyo.syukyoshi@gmail.com (事務局)
- 中部 tanaka.amitabha@gmail.com (田中至道)
- 関西 shimidzu_masahiko@yahoo.co.jp (清水正彦)
- 中国地方 bluefrog@gmail.com (桝野統胤)
- 九州 k.rinsyu@gmail.com (事務局)

種智院大学 臨床密教センター
第1回臨床宗教師養成講座 報告
2017年6月8日発行(第2刷)

編集後記

種智院大学 臨床密教センター初となる臨床宗教師養成講座が今年行われました。2015年4月に設立された当センターから、ようやくこのような形で皆様にご報告できることを嬉しく思います。

今回7名の受講生の方々と一緒にさせていただきましたが、どっぷりと他宗教の世界に浸った全体会は、本当に貴重な体験となりました。この研修にご協力くださいました講師の皆さま、天理教浪華分教会信者詰所の皆さま、お手伝いに駆けつけてくださった臨床宗教師の皆さまに心からお礼を申し上げます。

養成講座を修了された方々が、様々な分野で活躍されることを祈っています。これからも試行錯誤しつつ研修を開催してまいりますので、種智院大学 臨床密教センターをどうぞよろしくお願いいたします。

寄付のお願い

臨床密教センターの理念及び臨床宗教師養成の趣旨に賛同してくださる方に寄付金をお願いしております。

【寄付金の目的・使途】

目的：臨床密教センターの運営及び臨床宗教師養成講座等、センターの実施する講座等運営の為に必要な費用に充当することを目的としております。

使途：臨床密教センターの経常的経費及びセンターの実施する講座等の運営費に充当いたします。

【寄付金の免税措置について】

臨床密教センターが設置されております学校法人綜藝種智院は、文部科学大臣から寄付金募集について特定公益増進法人の認可を受けています。ご寄付をいただきました場合、以下の基準により個人又は法人の所得から控除され、税制上の優遇措置を受けることができます。

【寄付に関するお問い合わせ】

学校法人綜藝種智院 法人事務室
Tel：075-604-5600（大学代表）
〒612-8156 京都市伏見区向島西定請70番地

種智院大学 臨床密教センター



〒612-8156
京都市伏見区向島西定請 70
Email: rinmitsu@shuchiin.ac.jp
Tel&Fax: 075-604-5743